

動

くもり落ちる制帽、袖の白いブレザー、指先の余るほどたちが、本物の車掌さんの手ほどきを受け、車輛のドアの開閉や車内アナウンスなどの「仕事」に取り組んでいる。表情に浮かんでいるのは、恥ずかしさと誇らしさのように見える。

舞台となったのは、千葉県内地下鉄東西線の終着駅西船橋から東葉勝田台駅までを20分ほどで結ぶ東葉高速鉄道東葉高速線だ。1996年に開業したこの路線は、沿線に多くのベッドタウンを生んだ。2年後の98年、八千代中央駅近くにUR賃貸住宅の八千代ゆりのき台パークシティが建設された。車掌に扮した子どもたちもその住人だ。彼らは普段から馴染みのある鉄道で、普段はできない特別な体験を楽しんだ。

◆子どもを団地の外に連れ出す

子どもたちの冒険をアレンジしたのは、子育て支援サービス「キ

がてら会話を楽しむ「コミュニティイランチ」などは、JTBが独自に提供するサービスだ。一方、団地住民にもキッズサポートくらぶの運営の協力を仰ぎ、団地全体で子育て支援を展開する取り組みも用意した。サービスを受ける住民を利用会員とし、サービスの提供に協力してくれる住民を協力会員とした。これがもう一本の柱となる「助け合い」である。

当初、JTBは子育てを終えた

団地の外に子どもたちは探検に出掛ける



子育て支援の未来形をさぐる 千葉・八千代ゆりのき台パークシティ (1998年・平成10年)

新田匡史
につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata



変わる日本の「暮らし」と「まち」

19

「ただ、これまでは集会所を学童保育室やカフェに転用するなど、その団地独特のサービスばかりでした。これらのサービスのいいところを取り入れ、全国の団地で展開できるサービス、運営能力の高い事業者との連携など、新たなビジネスモデルを模索しています」

UR住宅経営部の佐藤綾香はそう語る。昨年、その一環として住民の多様なニーズに対応する企画を募り、来年3月までキッズサポートくらぶを試行することが決定した。採用された事業者の一つがJTBの関連企業だ。彼らが提案したのは「イベント」と「助け合い」の二本柱だった。

イベントのメインプログラムとなったのは、JTBが数年前から展開する「旅いく」である。

「子どもの成長には、いろいろな体験が必要です。本物の体験の宝

庫である旅は、子どもの感性を育む絶好の機会なのです」

JTBの脇田憲司氏は、キッズサポートくらぶの企画に「旅いくキッズ探検隊」を入れた意義についてそう語る。子育て支援は団地内の活動が中心だ。だが、旅いくキッズ探検隊は子どもたちを団地の外に連れ出し、家族や友だちと一緒に未知の世界を体験してもらおうという仕組みだ。

初回は築地市場の見学としらすのふりかけ作り。2回目は冒頭の車両基地見学と車掌体験。続く3回目は、墨田区に出かけて伝統工芸「からくり屏風作り」を体験した。参加した子の母親は語る。

「伝統工芸に触れる機会はなかなかないので、いい経験でしたね」ほかの母親も「とても魅力的なイベント」と口を揃える。

◆子どもが親を引っ張り出す

旅いくをはじめ、3人乗り電動アシスト付自転車を出す「チャリシェア」や、集会所でランチ

めていきたいと思えます」

脇田氏はそう語る。その代わりに、パークシティでは従来の子育て支援にはない反応がある。3人の子を育てる母親は言う。

「知らない子どもと約束をしてくるようになったんです。よく聞くと、違うクラスの子や学年の違う子。集会所で仲良くなり、交友関係が広がっているようです。最近では、集会所に行つてくると言つて家を飛び出していくようになり

ました。行き先がわかっているのに、安心していません」

子どもたちは、集会所を開放する「放課後キッズルーム」や、子ども遊びの会でのイベントで仲良くなったのだ。お菓子づくりや敬老の日のプレゼントをつくる企画など、掲示板のイベントカレンダーを自分で見ては、親を引っ張り出すようになったという。従来の子育て支援は、子育て中の母親の支援だった。しかし、パークシティでは子どもが主役のように見える。子どもを惹きつけるプログラ

ムが結果的に親に安心を与え、母親のつながりも生んでいる。

団地における子育て支援の究極の目的は、昔ながらの長屋の関係づくりだ。そのためには子ども同士、母親同士に加え、子育てに協力する住民と子育て世帯が信頼関係で結ばれる必要がある。

現在、パークシティの利用会員は53世帯（小学生以下の子どもがいる世帯）にのぼる。会員は「家族ぐるみの泊りがけ旅行」「子どもだけの校外学習」を望むなど、夢を膨らませる。

URは、団地における現代版コミュニティの形成とビジネスモデルを引き続き模索する。どのようなきっかけが必要か。どのようなイベントが魅力的か。どのような仕組みとルールがあれば安心を提供できるか。住民の輪を広げるための試行錯誤は続く。

街に、ルネッサンス



[企画制作] 新潮社